

第74回 企業活性化研究分科会・議事録

＜第七四回 2014年12月6日（土）時間：13：30～17：00 於：専修大学（神田校舎）＞

参加者：井端、大野、小林、齋藤、杉本、高市、夏目、浜田、宮川、山本、渡邊（11名）

1. テーマ：再生企業の分析—椿本興業株式会社—

- ・報告者：小林宗一郎
- ・配付資料：7枚
- ・報告内容の要旨

本報告では、椿本興業株式会社（以下、椿本興業とする）の収益性、内部統制問題、再生可能性の検討の3点について、分析検討をおこなった。

椿本興業は、取引先に対して水増し発注または架空発注をおこなっていた。この行為は同社の取引関係をみると子会社、取引先に対する資金繰りの援助を目的として行われていたと推察した。平成18年に税務調査が入り、水増し発注および架空発注の指摘を受けた。当該指摘を受けたのち資金援助目的が困難となり、複数の企業をまたいだ循環取引による不正をおこなった。椿本興業では、仕入の検収や仕入代金支払いまで営業担当者の職務であり、営業部門に職務集中が行なわれていたため不正の起こりやすい環境が形成されていた。それゆえ、椿本興業では、社内環境の改善と、内部統制システムの再編成が必要であると指摘した。

また、ROEは変動幅が大きく、不正処理後に大幅に低下した。しかし、翌期には不正処理前の数値を上回る点で議論が生じた。財務数値に関しては純損失計上の無いものの、利益の持続性が判断できないため、再生可能性を判断できないとした。報告者は、収益源確保のため、医療分野へさらなる注力をすることで持続的な利益を計上できるであろうと推察した。

さらに、分科会の今後の方向性を議論し、財務数値の動きから不正を見抜き、財務数値の矛盾点を指摘できる能力を身につける課題の議論もおこなった。

2. テーマ：『売上債権による取引先管理②』

- ・報告者：井端和男
- ・配付資料：4枚
- ・報告内容の要旨

本報告では、前回報告（11月度分科会）の一部訂正をおこなった上で、永久性の性質をもつ誤差による相関係数への影響に関する分析を試みたものである。

分析の結果、永久性誤差は、発生初期の段階では相関係数を上昇させるが、徐々に平均値に取り入れられるにつれて上昇率を低下させ、最終的には誤差全額が平均値に取り入れられ、誤差発生前の状態へと戻ることとなった。相関係数に関する分析では、計算期間の中間時点を過ぎると係数が低下し、最終的にはもとの正常値へ戻る性質があることを指摘し、さらに相関係数分析を応用させる場合での危険性もまた指摘した。

3. 今後の予定について

- ・1月24日（土） 宮川先生—ユニチカー
- ・2月 不実施
- ・3月（上旬予定） 高市先生—雑貨屋ブルドック—

（文責：夏目拓哉）